坂口安吾における「絶対の孤独」と「郷愁」

王　愛武*

The Meaning of Words “Absolute Loneliness" and "Nostalgia" in Ango Sakaguchi

Aiwu　Wang*

Abtract

When reading the Ango Sakaguchi literature, you often meet with the words “absolute loneliness” or “nostalgia”. It means the human’s true character .After understanding the solitary of human’s true character, Ango Sakaguchi addressed the Japanese by saying “to live” and “to degrade” who had fallen into thought confusion at during the war and the postwar period. He said that we should make a living according to human true character.

Key words:　loneliness, nostalgia, human’s true character, degradation, nothingness

（一）

坂口安吾の代表作の一つと言われている小説「桜の森の満開の下」（『肉体』1947・6）は山賊と美女の葛藤する物語である。山賊はずいぶんむごたらしい男であっても、桜の森の花の下へ行くと恐怖感に襲われて、気が変になる。山賊は美女の言いなりに行動し、美女と共に都へ引越していく。美女の機嫌を取るために人間の頭を捕ってくる。山賊はとうとう美女のきりのない欲望に呆れ、女を背負って、ふるさとの山奥へ戻っていく。桜の森の下に来たら、発狂して、美女とともに無限の虚空へ消えてしまう。小説の結末に近いところに、こういう表現がある。

桜の森の満開の下の秘密は誰にも今も分かりません。あるひは「孤独」といふものであつたかも知れません。なぜなら、男はもはや孤独を恐れる必要がなかつたのです。彼自らが孤独自体であり

＊教養部・中国中南大学

ました。

「桜の森の満開の下」は敗戦2年後に書かれた短編小説である。「堕落論」や「白痴」に続き、反逆者の坂口安吾は再び反逆の筆を取って、メタファーの手法で孤独と虚無を描写する。「孤独」や「絶対の孤独」というのは坂口文学によく登場する言葉である。通常の意味で解釈したら、混乱を招きかねない言葉である。安吾は「文学のふるさと」(『現代文学』1941・7）という評論で、孤独は「生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独」であると解釈している。

なぜ、人間の生存自体が孤独なのだろうか。それは人間存在が個体として独立であるはずなのに、普段は関係性にしか生きることができないからである。個人の存在は独立しているのと同時に他人とも絡み、この他人との関係で人間は孤独を感じる。人間は生まれながら孤独であると言えよう。すると、孤独は人間の本質である。

「文学のふるさと」は安吾独自の文学観と人生観を映し出す評論の一つである。安吾は「赤頭巾」(ペローの童話)、「鬼瓦」(日本狂言)、「伊勢物語」の例を挙げて、文学の本来の目標がモラルではなくて、人間の「孤独」本性を表現することだという意思を表明した。「この三つの物語が私達に伝へてくれる宝石の冷めたさのやうなものは、なにか、絶対の孤独――生存それ自体が孕んでゐる絶対の孤独、そのやうなものではないでせうか」と書いている。坂口安吾は文学の本質と人間の本質の「孤独」を重ねて、文学のモラルを論じている。「私は文学のふるさと、あるひは人間のふるさとを、ここに見ます。文学はここから始まる」と言っているが、「ここ」とは孤独のことである。文学の本質は人間の本性を表現すべきものである。文学は人間の本性を表現しないとアモラルである。そして、人間の本性とは何であろうか。孤独である。「絶対の孤独」は人間の生存に存在している。これは人間坂口安吾の見方である。

その後、坂口安吾は相次いで、「日本文化私観」(『現代文学』1942・2）や「青春論」(『文学界』1942・11）や「堕落論」(『新潮』1946・4）や「続堕落論」(『文学季刊』1946・12）などをこの世に送り出して、人間の本性の真実を引き続き追究する。

文学の道に歩む前に、坂口安吾はもう人間本質の孤独性に気づいたのだろう。安吾の人生は父への侮蔑と母への憎悪から出発する。充分に父母から愛を与えられなかった子供の安吾は人間世界から疎外され、自然に向かって歩むほかなかったのである。人間世界から見捨てられた心は、海と空と風の中に自分のふるさとを見出したのである。海も空もはてしなく無限であった。その捉えようもない巨大さの中に孤独と虚無を宿していた。そこには無限への衝動が秘められていた。そして、安吾は幼少時から、もう「孤独」を充分味わっていた。

> 生存の孤独とか、我々のふるさとといふものは、このようにむごたらしく、救ひのないでありませうか。（中略）モラルがないといふこと自体がモラルであると同じやうに、救ひがないといふこと自体が救ひであります。

「文学のふるさと」の一文である。孤独は救いのないものだからこそ、解決しなければならぬ、救いのないことが救いである！これを読むと、思わず中国の古代思想家・老子の「無為而治」＊を思い出す。

老子は天地の万物が道（即ち自然）によって造られ、物事を自然のままに発展させるべきだと主張する。「人法地，地法天，天法道，道法自然」（『道徳経・25 章』）①と、「自然」を最も重要な位置に置く。「救ひがないということ自体が救ひである」という安吾の考え方は老子の思想とほとんど同じである。自然は人間の力を借りずに物事をその軌道に乗せるものである。孤独は救いのないものなら、救いのないままにすれば、自然に救われる。孤独は人間の本質なので、人間を人間らしくするものではないだろうか。

「文学のふるさと」というエッセイで「生存の孤独」を提起してから、安吾は「青春論」で「魂の孤独」を論じている。

> 世に孤独ほど憎むべき悪魔はないけれども、かくの如く絶対にして、かくの如く厳たる存在も

亦すくない。僕は全身全霊をかけて孤独を呪ふ。全身全霊をかけるが故に、又、孤独ほど僕を救ひ、僕を慰めてくれるものもないのである。この孤独は、あに独身者のみならんや。魂のあるところ、常に共にあるものは、ただ孤独のみ。

坂口安吾は「孤独」を「厳たる存在」と思い、魂とともに存在するものだと考えている。孤独は「魂の孤独」である。子供の頃から、孤独を充分に味ったから、安吾は孤独を呪いながら、愛して、感謝している。

戦争中、安吾は人間の真実の美を探していたが、「戦争中の日本は嘘のやうな理想郷で、ただ虚しい美しさが咲きあふれてゐた」。但し、安吾から見れば「それは人間の真実の美しさではない」。人間が心の中で本気に望んでいるものではない。そして、安吾は「堕落論」の中で、「運命に従順な人間の姿は奇妙に美しいものである」から、人間は「堕ちる道を堕ちきることによつて、自分自身を発見し、救はなければならない」と呼びかけている。

「堕落論」は思想の混乱状態に陥った日本人に大きな力を与えた。当時、敗戦直後の日本は従来の道徳体系が崩れたが、新たなモラルシステムが成り立っていなかった。人々は思想虚脱や無力状態で苦しんでいた。「堕落論」は人間通の安吾が人性を洞察して、日本人に徹底的な「堕落」の道に歩もうと呼びかける評論である。人間だから、人間らしく生きていけばいいという意味である。「堕落論」（後に「続堕落論」も出版）は敗戦直後の特殊な社会情勢や政治状況の中から生まれたものではなく、戦時下の「日本文化私観」や「青春論」の延長線で書かれた作品だと思われている。「青春論」で安吾は「淪落の世界」と「淪落の人々」を呪いながら、「僕の魂は、又、この世界に憩ひを感じ、ふるさとを感じる」と書いている。「淪落」は「堕落」ほど、人々の注意を喚起しない言葉ではないだろうか。「堕落論」では、安吾は「堕落」という極端の言葉を使って、従来の虚無な掟を捨て、人間の本性に戻ろうと多くの日本人を目覚めさせた。日本人（特にインテリ）は「堕落論」を読んだ後、大きく刺激されて、目から鱗が落ちるように戦後の混乱思想から脱け出した。

坂口安吾は情痴作家と認められ、その文学が「肉体文学」というラベルを貼られているように、男女の肉体関係を重視する作家である。「戯作者文学論」(『近代文学』1947・1)で、坂口安吾は大文豪の夏目漱石でも、その「作品が全然肉体を生活してゐない」のに驚いて、「人間関係を人間関係自体に於て解決しようとせずに、自殺したり、宗教の門をたたいたりする」と、大文豪を批判している。人間の本性を無視し、小説を書くことには安吾は堪えられないのである。人間関係を解決する時に、人間の本性に従うべきである。そのほかに他の道はない。これは安吾の人間性への認識である。

更に、坂口安吾は「私は海をだきしめてゐたい」(『婦人画報』1947・1)では、「私が孤独の肉慾にむしろ満たされて行くことを、私はそれが自然であると信じるやうになつてゐた」、「肉慾すらも孤独でありうることを見出した」、「人の魂は永遠に孤独」である、と書いている。肉慾が満たされることが自然なことである。肉慾は孤独と同じように人間の本質である。これは当時においては、大胆な発言であろう。安吾における孤独が人間の本性であることから解釈すれば、肉慾は確かに人間の孤独である。文学創作の面でも、生活の面でも、坂口安吾は孤独を一貫して追求し、「肉体」や「肉慾」を手掛かりに、人間の本性の奥まで探っていく。

(二)

「ふるさと」や「郷愁」などの言葉も坂口安吾文学によく登場している。安吾における「ふるさと」は「孤独」と同質の物である。「私は文学のふるさと、或ひは人間のふるさとをここに見ます。文学はここから始まる」(「文学のふるさと」)と、「ふるさと」を「孤独」と同列している。もしも誰かが安吾文学を猥褻文学と思うなら、「あなたの魂自身が魂自身のふるさとを探すようになる日まで」(「余はベンメイす」『朝日評論』1947・3)私の作品を読んではいけないと安吾は忠告している。

坂口安吾における「ふるさと」は人間の本性の別称でもある。そもそも、ふるさとは人間の最初の出発点であり、最後の落ち着き先でもある。遠く離れて他郷にいる旅人は、ふるさとには深

い思いを籠めている。小さい時から、充分な父母愛を与えられなかった孤独の安吾が新潟の故郷に抱いていた感情は憎しみでもあるし、懐かしみでもあろう。心の奥で大事にしている所である。安吾文学においては、故郷は孤独と同じく、大事な存在でもある。郷愁からも孤独が見出されている。

本当に可愛いゝ子供は悪い子の中にゐる。子供はみんな可愛いものだが、本当の美しい魂は悪い子供がもつてゐるので、あたゝかい思ひや郷愁をもつてゐる。(「風と光と二十の私と」(『文芸』1947・1)

これは「風と光と二十の私と」の一文である。この自伝小説は坂口安吾の20歳ごろの出来事を記している。中学卒業後、安吾は小学校の代用教員になって、子供たちと一緒にいながら、相変わらず放縦な生活をしている。子供たちに魂の美しい一面が見えて、郷愁があるのに発見する。子供は大人世界にある偽りを有さず、純粋である。悪い子は大人の目にだけ悪い子であって、本当に悪いのではない。人間通の安吾は鋭い目で子供たちの天性―「郷愁」を見出している。

郷愁とは故郷を思い慕う気持ちで、淡い憂いである。安吾は小菅刑務所とドライアイスの工場が「僕の郷愁をゆりうごかす逞しい美感がある」(「日本文化私観」) と発見している。なぜかというと、両者には美のために美を加工する余計な何物もないからである。心を郷愁へ導いて行く力がある。

美しさのための美しさは素直でなく、結局、本当の物ではないのである。要するに、空虚なのだ。さうして、空虚なものは、その真実のものによつて人を打つことは決してなく、詮ずるところ、有つても無くても構はない代物である。

坂口安吾は最後に、素直な美のないものはなくてもいい、法隆寺も平等院も焼けてもいいと、

極端な発言をし続けている。人間通でもあるが、世間知らずの安吾は生き方の誠実さを追求し、空虚なものには忍耐できないはずである。

（三）

坂口安吾における孤独は通常の意味での孤独ではない。人間の生存でもあり、「ふるさと」でもあり、「郷愁」でもあるものである。この世のあらゆる虚飾と偽善を捨てて生きていく人生観である。人間は生きている限り、孤独である。人間の最後の行き場まで生きてゆく。「堕落論」は日本人が「堕落することによって、真実の人間へ復帰しなければならない」と呼びかけている。「堕落のもつ性格の一つには孤独といふ偉大なる人間の実相が厳として存してゐる」からである。

「桜の森の満開の下」は敗戦後の 1947 年 6 月に『肉体』という雑誌に発表された。「日本文化私観」や「堕落論」や「白痴」の延長線に書かれた小説だと言われている。その冒頭の部分に「桜の花の下から人間を取り去ると恐ろしい景色になります」という一行がある。従来の日本人の桜へのイメージとはまったく違うものである。小説が展開するにつれて、男女二人の恐ろしい関係が見えてきた。小説の最後に、桜の花の下にはひっそりと無限の虚無が充満しているが、男があれほど恐れていた「孤独」と共に消えてしまうと書いてある。

これは男女二人の葛藤する物語だけではない。この小説を創作する坂口安吾の真意は一体、どこにあるのか。これも「孤独」を主題とする作品である。桜の花の下に広がっていく無限の虚無が当時の人々の空虚な精神状態を暗示している。桜の森の満開の下に「孤独」という秘密が潜んでいるが、「桜の森の下の秘密は誰にも今も分かりません」から、人々は怖れや不安を感じている。当時の日本人は従来の道義が崩れても、新たな道徳体系ができていない時期に、混乱思想に堕ちている。人間は生きているから、人間らしく生きていくのが当たり前だという人間性の「孤独」の秘密が分かっていないから、怖れや不安を感じている。

だが、山賊はもう、孤独を恐れない。というのは、「彼自らが孤独自身」であるという秘密が最早分かったからである。坂口安吾は一連の小説やエッセイで、人間の本性が孤独であり、「堕ちる

を堕ちきる」べきであると論じてきたが、「桜の森の満開の下」をもって、再び人間孤独論を強調しただけである。

解釈　①人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る。

参考文献

１、坂口安吾全集 01／坂口安吾全集 02／坂口安吾全集 03／坂口安吾全集 04／坂口安吾全集 05／坂口安吾全集 06・柏原光成発行・筑摩書房・1998・6

２、野原一夫・人間坂口安吾・新潮社・1991・9

３、坂口安吾研究会・坂口安吾論集Ⅱ　安吾からの挑戦状・ゆまに書房・2004・11

４、相馬正一・坂口安吾戦後を駆け抜けた男・人文書館・2006・11

５、半藤一利・坂口安吾と太平洋戦争・ＰＨＰ研究所・2009・2

６、秦刚・樱花林下的孤独与虚无--读坂口安吾小说《盛开的樱花林下》・外国文学・2004・5

７、秦刚・以反逆的姿态“堕落”与“无赖”--日本作家坂口安吾文学创作概述・外国文学・2004・9

８、林进・冷风从盛开的樱花林里吹来--坂口安吾《盛开的樱花林下》・长春大学学报・2009・1

（平成 24 年 3 月 31 日受理）